

『一人ぼっちに思える時に』 (要旨)

聖書箇所：Ⅱテモテ1章6～8節,13～14節

テモテへの手紙第二は、パウロが記した最後の手紙として知られています。福音宣教者パウロは再び投獄され、死は目前に迫っていました。やがて処刑されることを意識した上で、「信仰によるわが子」テモテに最後の手紙を書き送りました。

【1】テモテという人物

ペンテコステ（聖霊降臨）以降、福音は全世界に広がって行き、エルサレムから遠く離れた小アジアの南部リステラの町にも福音が届けられました。テモテはそうした福音の広がりを象徴するような人物でした。彼は異民族間の結婚によって生まれ、ギリシャ神話の世界観が息づく環境（参照：使徒14:8-18）で育ちましたが、ユダヤ人の母の信仰を受け継ぎました。

さてその彼に人生の転機が訪れました。パウロは第2次伝道旅行でリステラを訪れた際、テモテを見出しました（参照：使徒15:36-16:3）。その出会いがテモテの歩みを大きく変えました。

テモテが伝道者として働くようになったのは、パウロとの出会いによるものでした。しかし彼の信仰は、祖母と母を通して伝えられたものでした（参照：Ⅱテモテ1:5）。祖母ロイスと母ユニケはテモテが幼い時から家庭の中で聖書を教えました（Ⅱテモテ3:15）。

▷伝道＝パウロというイメージを持ちますが、テモテの母ユニケは家庭において日々伝道していたのです。毎週の礼拝に集う小さな子どもたちも「求道者」の一人なのです。

【2】聖霊なる神様の働きに信頼する

パウロがこの手紙を書いた時、テモテはエペソの教会における働きの責任を担っていました。その当時、教会は異なった教えによる悪影響にさらされていました（参照：Ⅰテモテ6:20-21, Ⅱテモテ2:12-18）。若い伝道者テモテは、教会の大切なメンバーがそうした教えの影響を受けていることを目の当たりにしました。パウロはそうしたテモテに臆病風に吹かれて意気消沈することなく、委ねられた健全なことばを守るように励ましたのです。パウロは困難を前にしたテモテに、かつて与えられた「賜物」を再び燃え立たせるようにと励まし、力と愛と慎みの霊を与えてくださる聖霊なる神様に注目させました。

▷聖霊は、キリストを信じる者に恐れや弱さ

に打ち勝たせ、福音の証へと促します。

【3】自分に委ねられた良いもの

使徒パウロは神から福音を委ねられました（参照：Ⅰテモテ1:11）。パウロはそれをテモテに委ねました（同6:20）。そしてパウロはこの手紙が最後になることを意識し以下の勧めをしました。

「あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに、私から聞いた健全なことばを手本にきなさい。自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」（Ⅱテモテ1:13-14）

人は現状に厳しさを覚える時に、別の新しい手段に活路を見出そうとします。しかし福音について言えば、自分に委ねられたものをしっかりと守るようにと勧められています。しかもそれは人間の力や努力ではなく、「私たちのうちに宿る聖霊によって」のみできるというのです。

かつてパウロの元には多くの仲間がいました。しかし囚われの身となってからは殆どのクリスチャンが彼の元から去り、パウロのことを恥じるようになりました（1:15-18）。唯一ルカが犯罪者のようにつながれたパウロと一緒にいました（4:10-11）。こうしたパウロに対する評判は、パウロと共に働いて来たテモテの肩身を狭くさせていたのでしょうか。しかしパウロはテモテに「私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、神の力によって、福音のために私と苦しみをともししてください」（8）と述べるのでした。それはパウロに対する周りの評価が変わってもパウロが伝えた福音の価値は決して変わることがないことを確信していたからでした。

▷「福音」に生きることは、苦しむことでもありません。しかしその苦しみは一人で負うものではありません。同じ苦しみを経験する仲間とともに担うものなのです。

